



文化財保護シンボルマーク

京都府京田辺市

二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報

—— 三山木地区特定土地地区画整理事業地内の調査 ——

1999

京田辺市教育委員会

二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報

—— 三山木地区特定土地区画整理事業地内の調査 ——

1 9 9 9

京田辺市教育委員会

序

今回ここに報告しますものは、本市の南部にあります三山木地区で実施される大規模な土地区画整理事業にともなって行われた発掘調査の概要です。

これに先立って行われた試掘調査においては、事業地内から新しく4つの遺跡がみつかっています。そこで今年度から工事計画にあわせて発掘調査を行い、遺跡の範囲・性格の解明に努めることにしました。また、この区域には『続日本紀』にみえる奈良時代の駅家^{うまや}である山本駅が含まれる可能性が高く、その発見が期待されているところでもあります。

今回の調査では、二又遺跡からは平安時代の建物・柵列の跡や大きな井戸などが、三山木遺跡からは土器がつまった弥生時代の溝などがみつかるなど、京田辺市の歴史の埋もれた部分が徐々に明らかになりつつあります。

最後になりましたが、今回の調査にあたりましては、三山木土地区画整理事業関係の方々、土地所有者の方々、関係機関をはじめ多くの方々のご指導・ご協力を賜りました。あらためてお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財へのご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成11年3月

京田辺市教育委員会

教育長 村田 新之昇

例 言

- 1 本書は、平成10年度に京田辺市教育委員会が行った^{ふたまた}二又遺跡と^{みやまぎ}三山木遺跡の発掘調査の概要である。
- 2 調査は、京田辺市が行う三山木地区特定土地地区画整理事業にともない実施した。
- 3 現地調査は平成10年11月9日に開始し平成11年2月5日に終了した。
- 4 調査の組織は次のとおりである。

調査主体……京田辺市教育委員会
調査責任者……京田辺市教育委員会 教育長 村田新之昇
調査指導……京都府教育委員会・京田辺市文化財保護委員会
調査担当者……京田辺市教育委員会 社会教育課 鷹野一太郎
同 上 五百磐顕一
調査事務局……京田辺市教育委員会 社会教育課（課長 奥田 清）
調査参加者……阿知波琢士・嵯峨山俊道・福田 正・石田典生・植西美津子・原クニ江
作業委託……全京都建設協同組合
- 5 調査を実施するについて、京田辺市建設部区画整理課・三山木区画整理事務所の協力を得た。
- 6 調査期間中および本書を作成するにあたり、次の方々からご教示を賜った。記して感謝します。（順不同・敬称略）

高橋美久二・井上満郎・磯野浩光・肥後弘幸・平良泰久・奥村清一郎・伊野近富・
森下 衛・森島康雄・藤井 整・植山 茂・鐘方正樹
- 7 継続する調査を考慮し、二又遺跡・三山木遺跡の地区割りを行った。遺跡の北西に基点(0,0)を設け、南東に60m角を大地区とし、その中を3m方眼の小地区とした。

各基点は次のとおり。

二又遺跡 $X = -133,430\text{m} \cdot Y = -19,670\text{m}$
三山木遺跡 $X = -133,550\text{m} \cdot Y = -19,610\text{m}$
- 8 本書の執筆・編集は鷹野・五百磐が行った。

本文目次

1. はじめに	1
2. 調査経過	2
3. 二又遺跡	4
(1) 調査概要	4
(2) トレンチ概要	4
(3) 遺物	16
(4) まとめ	22
4. 三山木遺跡	24
(1) 調査概要	24
(2) 主な遺構	24
(3) 遺物	27
(4) まとめ	31

挿図目次

第1図 調査地位置図	1
第2図 作業風景（三山木遺跡）	2
第3図 区画整理区域内遺跡図	3
第4図 二又遺跡トレンチ位置図	4
第5図 土馬実測図	4
第6図 1トレンチ遺構実測図	5
第7図 二又遺跡遠景（西から）	6
第8図 SB981297 柱・礎板	6
第9図 1トレンチ全景（北から）	7
第10図 1トレンチ南部（南から）	7
第11図 SA981298 ツボ出土状況	8
第12図 鉄製把手実測図	8
第13図 SK98277 皿出土状況	8
第14図 2・3トレンチ遺構実測図	9

第15図	井戸B櫛実測図	10
第16図	A井戸側の打刻印	10
第17図	SE98301 (Z・A) 実測図	11
第18図	SE98301 (B) 実測図	11
第19図	SE98301 (東から)	11
第20図	4トレンチ全景 (東から)	12
第21図	4トレンチ遺構実測図	12
第22図	斎串実測図	13
第23図	SE98429実測図	13
第24図	SE98429	13
第25図	SE985145実測図	14
第26図	SE985145 (西から)	14
第27図	SE985145 (南から)	14
第28図	SE985122 (東から)	15
第29図	5トレンチ遺構実測図	15
第30図	遺物実測図 (1)	17
第31図	遺物実測図 (2)	19
第32図	遺物実測図 (3)	21
第33図	銭貨拓影	21
第34図	三山木遺跡トレンチ位置図	24
第35図	遺構実測図	25
第36図	トレンチ全景 (北から)	26
第37図	SK9814 (東から)	26
第38図	SK9816 (南から)	26
第39図	SK9823 (北東から)	26
第40図	SD9829 (西から)	27
第41図	SD9829 (北東から)	27
第42図	SD9829土器出土状況	27
第43図	SD9829実測図	28
第44図	SD9829完掘状況	29
第45図	石器	29
第46図	遺物実測図	30

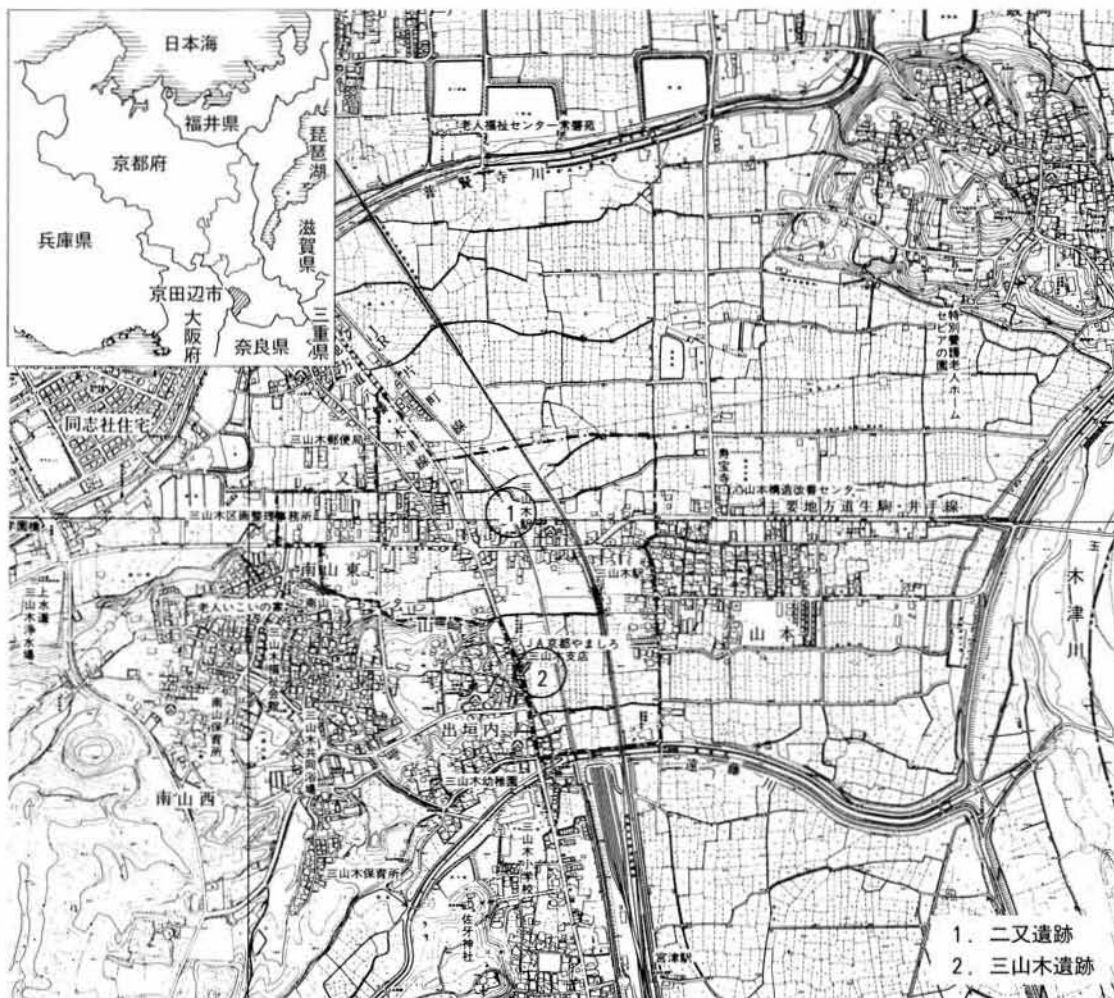
1 はじめに

京田辺市では、市南部の三山木地区において、約32haに及ぶ大規模な土地区画整理事業を行うこととした。このことにより京田辺市教育委員会では、平成9年11月から平成10年3月にかけて、区域内の試掘調査を行った。その結果4つの新たな遺跡が存在することがわかり、それぞれ東角田遺跡・二又遺跡・上谷浦遺跡・三山木遺跡と名付けた。

平成10年5月、試掘調査の成果をもとに市側と協議を行い、工事計画に合わせて、遺跡の公共用地部分の本格的な調査を行うこととした。

平成10年度は、二又遺跡と三山木遺跡のそれぞれ一部が対象となった。調査は平成10年11月9日から掘削を開始し、平成11年2月5日に現地の調査を終了した。

なお、土地所有者の方々をはじめ、三山木区画整理事務所などの関係機関、寒中あるいは雨天のなか作業に従事された皆さん、その他多くの方々の協力によって調査を行うことができた。記して感謝したい。



第1図 調査地位置図 (S = 1 : 15,000)

2. 調査経過

本年度は、鉄道と道路の予定地で二又遺跡と三山木遺跡の一部が対象となり、合わせて約1,800㎡の発掘調査を行った。

調査地はこの地区を南北に走る府道八幡木津線の東側に広がる耕作地にあり、掘削は稲刈りを待ち、平成10年11月9日から開始し、平成11年2月5日に終了した。今年は雨が少なく、天候に恵まれ、強行軍ながらも比較的スムーズに調査を行うことができた。

調査はおよそ平成10年11月から12月で二又遺跡、明るく平成11年1月から2月初まで三山木遺跡と2期に分けて行った。

二又遺跡の調査地はJR三山木駅で東西に分かれており、調査は西側から順次行った。西側調査地は南北に長く、まず両端で試掘し遺構の存在を確認したところ、北は粘土と砂の層で遺構がなく、南では厚い遺物包含層が見つかった。このため計画を少し変更して、北側（1トレンチ）を縮小しトレンチを南にずらし（3トレンチ）掘削を行い、約900㎡のトレンチを開けた。この調査地は特に湧水が激しく、水没・壁の崩落を防ぐために、水抜きをつくり、汲み上げ続けた。

西側調査地では、遺物包含層から多量の遺物が見つかった。その下の遺構面からは、飛鳥時代から平安時代までの多数のピット・土坑、溝の他井戸（木組み）が見つかった。ピットの中には、建物・柵列として復原できる一群もあった。

調査が一段落した12月初めからは、調査の続く井戸を残し、東側の調査にかかった。東はJR・近鉄間に2か所（西から4・5トレンチ）、合わせて約560㎡を掘削した。4トレンチは、湧水は少ないものの、遺物包含層は粘質で遺物も多くみつき掘削に多くの時間を要した。遺構の数は少ないが、奈良時代の刳り貫き井戸が見つかった。遺構掘下げ後、井戸を残し、次に移った。

5トレンチでは、空撮の日程との兼ね合いのため、遺物包含層を北側約1/3残した状態で完掘し、12月25日に実機による空撮を行った。その後4トレンチの井戸枠の取上げ、



第2図 作業風景（三山木遺跡）

そして5トレンチの残り部分を下げた。ここでは新たに木組み井戸2基（7世紀・12世紀）をみつけ、調査の後、新年始めに取り上げを行い、東側調査地の調査を終えた。

二又遺跡では、新年1月6日に記者発表を行い、1月9日に西側調査地を対象として現地説明会を行った。



第3図 区画整理区域内遺跡図 (S = 1 : 5,000)

その後重機により1トレンチ西側の拡張と、3トレンチの井戸掘方の断割りを行った。井戸は井戸枠材の取り上げをしつつ、実測を行い構造の把握に努め、1月19日に完掘。二又遺跡の全ての調査を終了した。

1月7日からは二又遺跡と平行して、南の三山木遺跡の調査も開始した。南北2か所に試掘のトレンチを掘り層位・遺構を確認し、中心東西方向に約300㎡のトレンチを開けた。西側では重機掘削中から遺構の一部がみえ、弥生土器が多く見つかった。精査を行ったところ全体に弥生時代の遺構が見つかった。順次掘り下げ、1月27日実機による空撮を行った。その後、西側の弥生土器の詰まった溝を中心に調査を進め、2月5日に全ての調査を終了した。

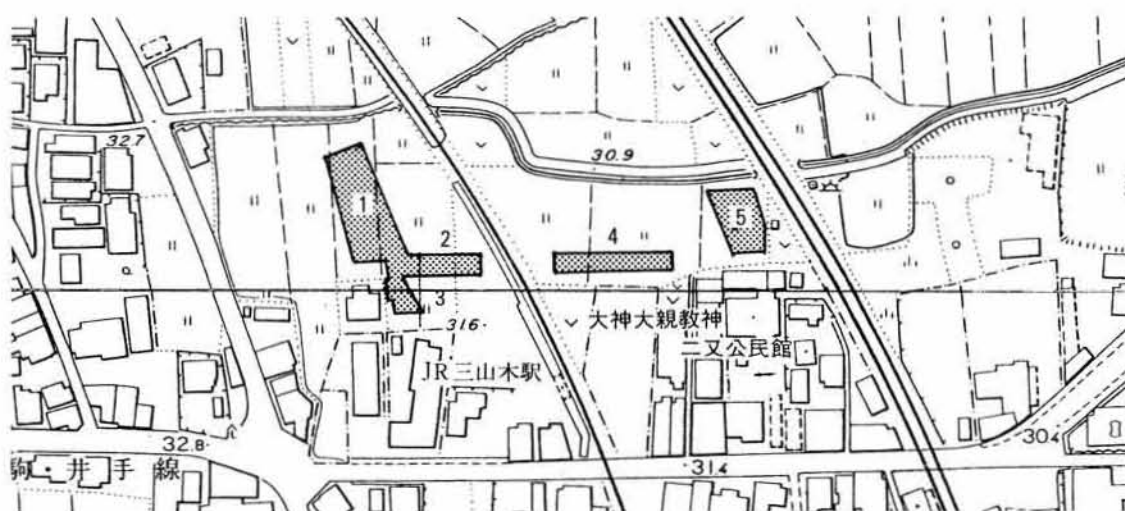
3. 二又遺跡

(1) 調査概要

二又遺跡のある三山木地区の地形は、西側の丘陵から東の木津川に流れ込む普賢寺川を中心とする小河川の沖積作用によりできた平地で、砂層と湧水が全域で見られ、東に緩やかな傾斜をみせる。調査地の基本層序は、上層から耕作土、その下に中近世の層（灰褐色～黄灰褐色、厚い）があり、次いで古代の遺物包含層（暗褐色）となり、遺構面になる。昨年度の試掘調査では、JR三山木駅を挟み西側では主に奈良時代から平安時代、東側では平安時代後期から鎌倉時代の遺構・遺物がみつかった。

掘削は遺物包含層上面までを重機で、以下を人力で行った。またみつかった遺構には、調査年度・トレンチ・番号を順に連ねたものを遺構番号として与えている。

今回の調査では、飛鳥時代（7世紀）に始まり、鎌倉時代前期までの遺構・遺物がみつき、広範囲な遺跡の展開がわかった。



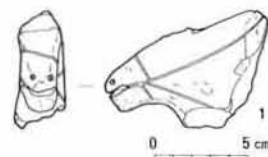
第4図 二又遺跡トレンチ位置図

※数字はトレンチ番号

(2) トレンチ概要

1 トレンチ 北西にある最も広い調査地。二又遺跡のほぼ中央北限、Ⅲ地区に位置する。遺構面は北西から南東へ緩く傾斜している。遺構面であるベース層は砂質土で、南側では粘質土に変わる。西側は湧水が激しく、水を汲み上げ続ける必要があった。

遺構面上層の暗褐色遺物包含層は、南半部に厚く堆積しており、遺物が集中していた。大半が土器で、かなりの数量に及ぶ。器種は、土師器・須恵器を中心に、黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・



第5図 土馬実測図



第6図 1トレンチ遺構実測図



第7図 二又遺跡遠景（西から）

製塩土器・瓦の他、円面硯・土馬（1）・土錘等がみついている。奈良時代から平安時代のものが多く、なかでも緑釉陶器・灰釉陶器は、平安時代初期のものが多い。また、瓦器・磁器も若干みついている。

遺構は、ピット・土坑、溝が多数みついている。遺構は南半部に集中しており、遺跡の北限を思わせる。ピット内からみつかった遺物は平安時代前期のものが多く、時期差はあまりみられない。大型のピットには柱根・根石などが残っているものがあり、一部は柱穴として建物・柵列に復原することができた。溝は奈良時代のものがみつかった。

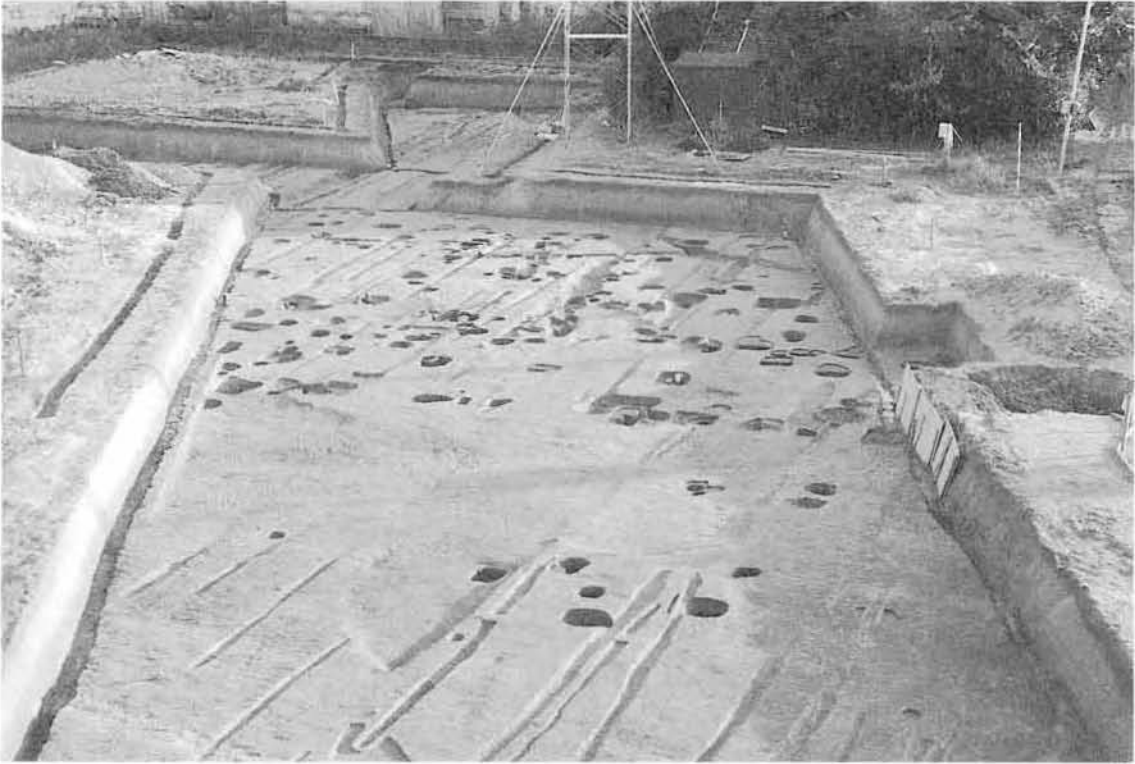
SD981134 南部中央の南北方向の溝。約7.5mの長さを持つが、大半を後代の耕作溝に切られている。土師器・須恵器の杯・カメなどの遺物がみついている。奈良時代。

SB981296 中央北よりにある東西2間（約3.1m）×南北3間（約4.9m）の掘立柱建物跡。東偏約6°の方向を持ち、約0.5～0.6mの柱掘方で構成される。内部から土師器・須恵器・黒色土器がみついている。平安時代。

SB981297 中央西隅の掘立柱建物跡。東西3間（約6.6m）以上×南北2間（約4.9m）、西偏約4°の方向を持つ。方形または円形の掘方は径約0.8～1mを測る。柱穴には、側面を八角形に面取りした、直径0.2mの太い柱根が残るものがあり、北東隅のものは約0.6m分残っ



第8図 SB981297 柱・礎板



第9図 1トレンチ全景（北から）



第10図 1トレンチ南部（南から）

ていた。またその西側では、柱の下に礎板が敷かれていた。内部からは、木材の他、土師器・須恵器・黒色土器がみつまっている。平安時代。

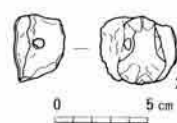
SA981298 中央西より SB981297の南にある東西方向の柵列跡。4間（約7.8m）以上の規模を持ち、西端はSB981297の掘方と重複する。柱穴部分に炭の多い黒色の埋土が入っている。うち東側2つめの柱穴からは、ほぼ完形の須恵器ツボ（10）が横転した状態でみつきり、その2つ西側からは、把手状の鉄製品（2）がみつかった。

この他、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器がみつまっている。

上記の遺構以外にも多くのピット・土坑がみつまっているが、建物として復原するには至っていない。遺構は南部に集中しており、重複した柱穴から、建物等を何度も建て直したであろうことがうかがえる。北や南（2・3トレンチ）の様子から、展開は東西方向（特に西側）に限られるようである。



第11図 SA981298
ツボ出土状況



第12図 鉄製把手
実測図

2トレンチ 1トレンチに南接する東西のトレンチ。地区割りでは、Ⅲ・Ⅳ・Ⅸ・Ⅹの境界に当たる。ベース層は西から東へ傾斜を見せ、西半部では粘質土、低くなる東半部は、遺物包含層は厚く堆積し、ベース層が粗砂にかわる。また粘土層が厚く低湿地の堆積をみせる。

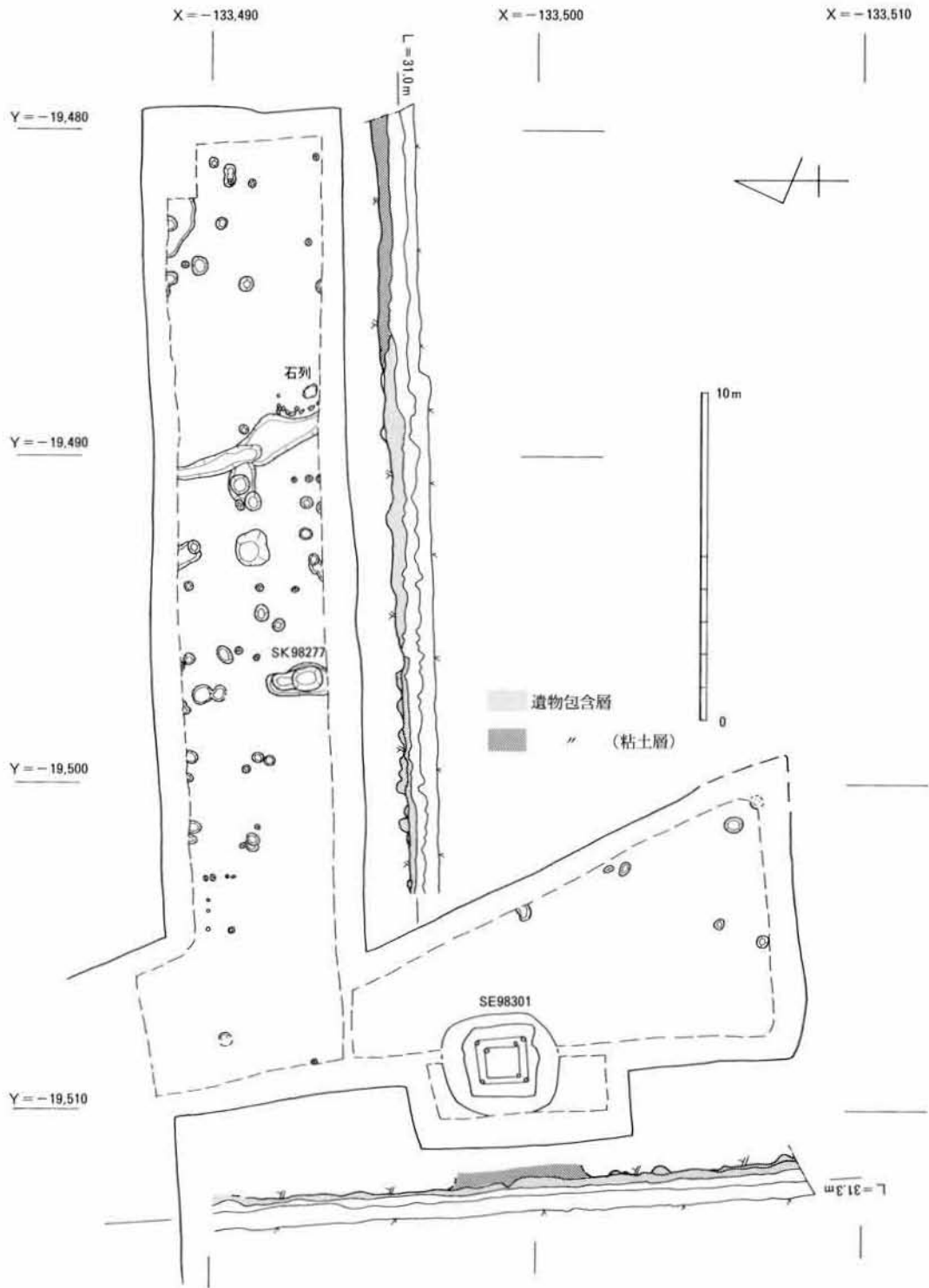
遺構は、西側は後代の耕作に伴う溝で大半が削られている。耕作溝以外では、小ピットが多い。飛鳥時代の土坑・溝が中央付近でみつまっている。東半部に石の集積点がみられた。これは、長径約0.5mの平石を中心に石が広がるが、性格は不明である。

SK98277 中央南よりにある、径約0.7m、深さ約0.6mの土坑。上層から土師器の椀（12）が、中層からは、土師器の椀（11）・須恵器の小ツボ（15）がみつかる。更に底部には、完形の土師器皿（15）が正位で置かれ、西側に割れた椀（13）が詰められていた。いずれも7世紀中頃のもので、性格は不明であるが意図的に埋納されたものと考えられる。



第13図 SK98277 皿出土状況

3トレンチ 1トレンチ南の調査地で、Ⅸ区の北東部。暗褐色の遺物包含層からは、平安時代から鎌倉時代の遺物がみつかった。遺構



第14図 2・3トレンチ遺構実測図

は西壁ぎわから井戸の一部が見つかったため、全容を知るために南北約7m分を、西へ約2.5m拡張した。

SE98301 3トレンチ西拡張部にある、西偏約6°の方向を持った木組み井戸跡で、直径約3.6mの大きな掘方を持つ。井戸は2度作り直され、外側からZ・A・Bとして調査を

行った。構造は全て縦板組みで、厚い転用材を使っている。上部構造は不明であるが、下部の残りは良い。井戸はそれぞれ内側につくり直され、互いの間隔はせまい。

井戸Zは最初につくられた一辺約1.4mの井戸。約0.2mの太さの柱を四隅に建て、縦板で周囲を囲み井戸側とし、内側は板等を棧にして固定している。下部には木材を組合わせた水溜を持つ。井戸側は合せ目の裏に板を当てた二重のもので、水溜上部を廻るようにつくられている。

掘方からは土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器(26)・瓦・木片がみつかった。土師器の中には、「田井」と墨書されたもの(32)がみつかった。遺物は概ね9世紀中葉のものである。

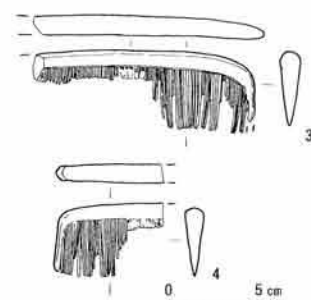
水溜は厚さ約0.08m、幅約0.11~0.16m、長さ約0.6~0.75mの材木にホゾ穴をあけ、ダボで直径約0.7mの桶状に組んだもの。外周下部には、藤蔓と思われる植物を2本撚ったものをタガとして2段廻らせ、楔で固定する。底部は、礫(栗石)の層で、木材の下部とレベルを合わす。遺物は、土師器・須恵器・木製品その他、底面の栗石直上から和同開珎(68)がみつかった。

この水溜は、井戸が廃棄されるまで使用されている。

井戸Aは、Zの内側に縦板を廻らせ、内側を棧木で固定した一辺約1mの井戸である。Zの破損に伴いつくり直されたものと思われる。最も残りが良い。井戸側の縦板は幅約0.25~0.35m、厚さ0.05mの板で、水溜の外側半ばまで入れられている。また板には「㊦」の打刻印を持つものが、4枚、6か所みつっている。井戸側の内側には上下2段の棧木が残っていた。上段は半裁した丸木を用い、下段は一辺約0.1mの角材を用いたホゾ組みの枠である。

遺物は小片のみであるが、土師器・須恵器・灰釉陶器がみつかり、井戸側の東外(Z-A間)からは隆平永寶(69)がみつかった。

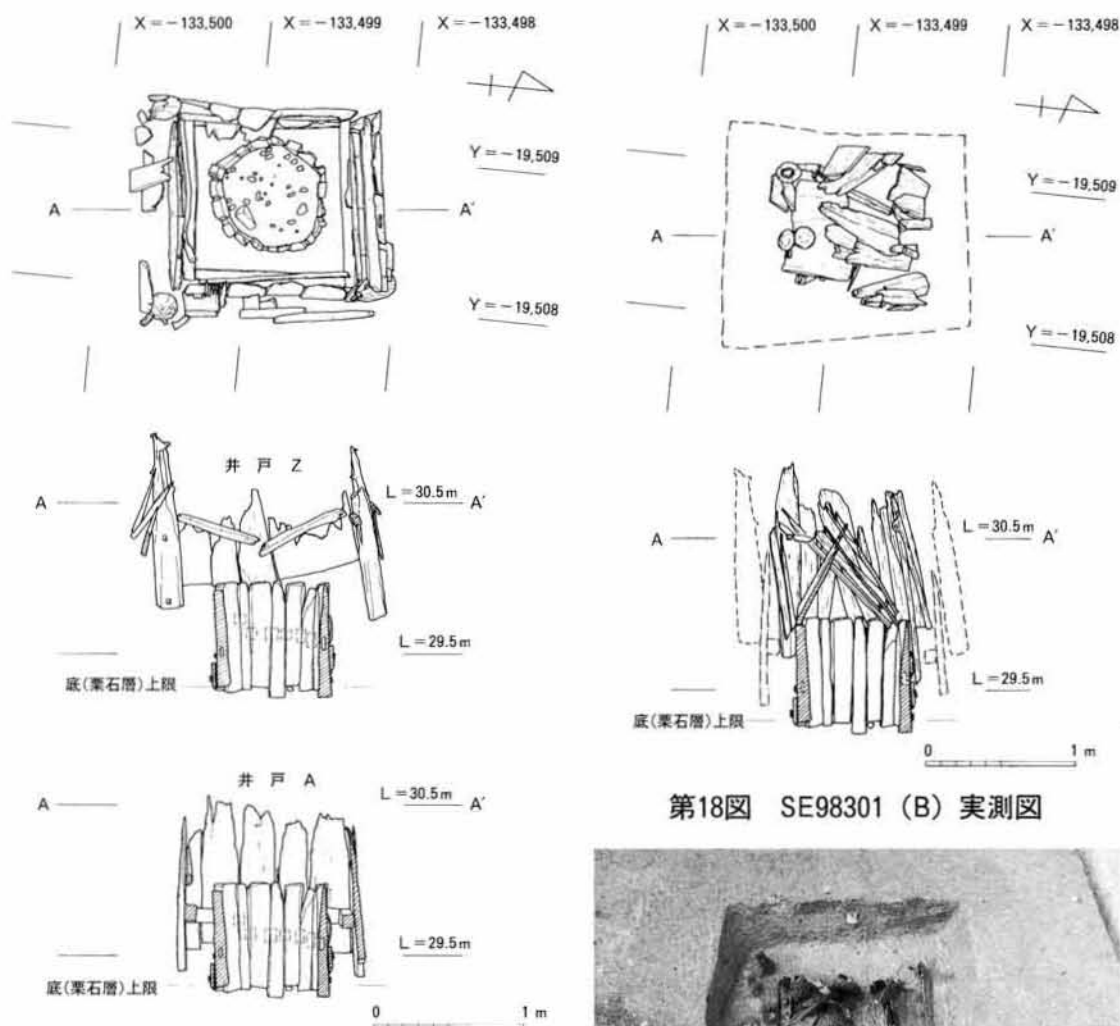
井戸Bは、Aの内側につくられた一辺約0.8mの井戸。北東・南西の2隅に柱を建て、縦板を廻らせ、内側を棧木で固定している。東の井戸側材はなく、南北の側板が内に倒れた状態でみつかった。2本の柱は径約0.2m。側板は二重で、裏には薄い板が当てられている。南板が約0.7mの幅を持つ他は、約0.2m程度の縦板で、厚さは約0.05mである。井戸側内からみつかった遺物は少なく、むしろ倒れた板の上面(廃棄時の埋土)から遺物がみつ



第15図 櫛 実測図



第16図 A井戸側の打刻印



第18図 SE98301 (B) 実測図

第17図 SE98301 (Z・A) 実測図

かっている。特に南側でみつかった完形の土師器杯2枚(16・17)は、井戸の廃棄に伴う祭祀に使われたものと思われる。また南下層からは、木製の櫛(3・4)、東側から饒益神寶(70)がみつかった。この他土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・瓦等がみつかった。遺物は10世紀初めのものが多くみつかった。

井戸は、遺物にみられる時期差が少なく、使用期間も短いようである。9世紀中葉～

10世紀初頭のもので、北側1トレンチの建物等に付随した施設と思われる。またこの井戸は、1mを超える大型のものであり、転用されている木材も良質の柱・板材であることから、付近にこの木材を使用した大型の建物の存在が想定される。それは、北側の建物等の



第19図 SE98301 (東から)

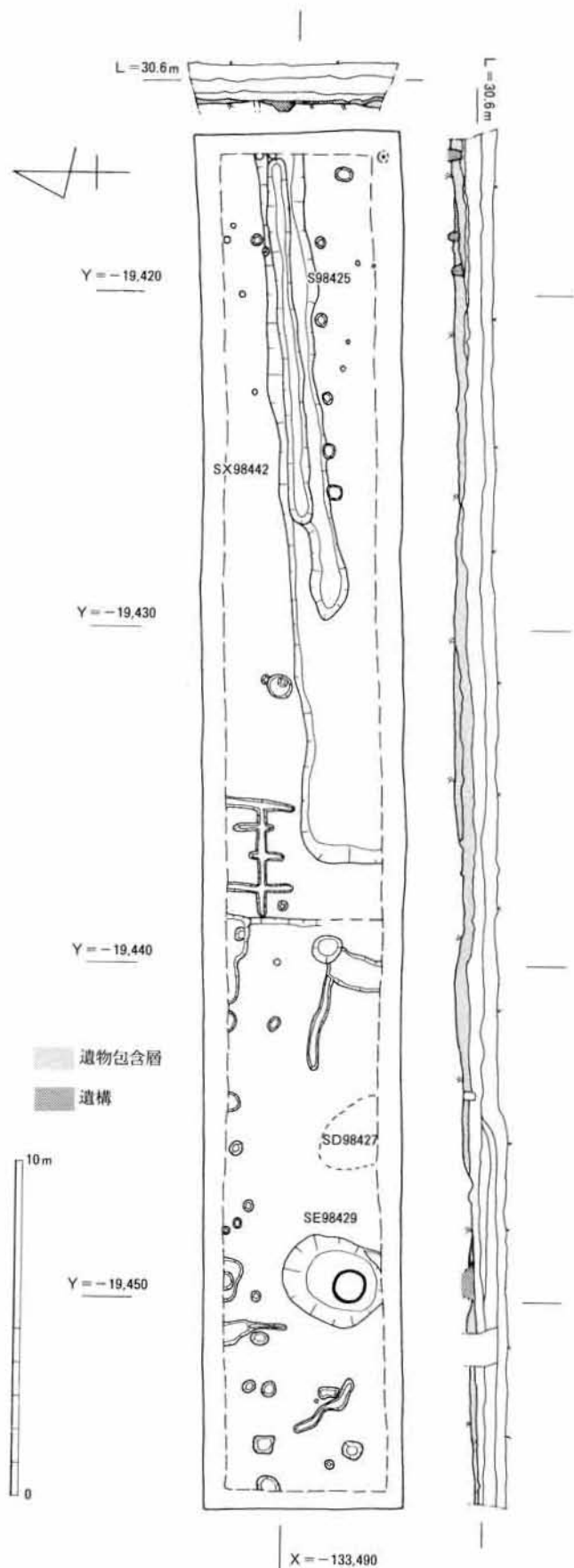
前身と思われる。

4 トレンチ 2 トレンチの東側にJR三山木駅を挟んで東に伸びるトレンチ。地区はIV・V・X・XIの境界に当たる。ベース層は、西から東へ僅かに傾斜する。暗褐色の遺物包含層は、平安時代の遺物を含むが薄く、遺構面上の窪んだ所には暗灰色粘質土が奈良時代の遺物を伴い堆積している。これはこの地区の遺構との関係によるものと思われる。遺構はピットの他、西側では井戸が、中央から東にかけて土塁状の盛土とそれに伴う溝が見つかった。

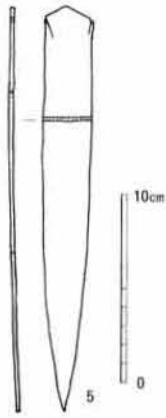
SD98425 中央から東に伸びる溝。西偏約4°で、幅約1m、深さ0.27m、長さ14m以上で東の壁に続く。南北に2本の溝がある。北溝は南を切り、約10.8mの長さを持ち、東壁



第20図 4 トレンチ全景(東から)



第21図 4 トレンチ遺構実測図

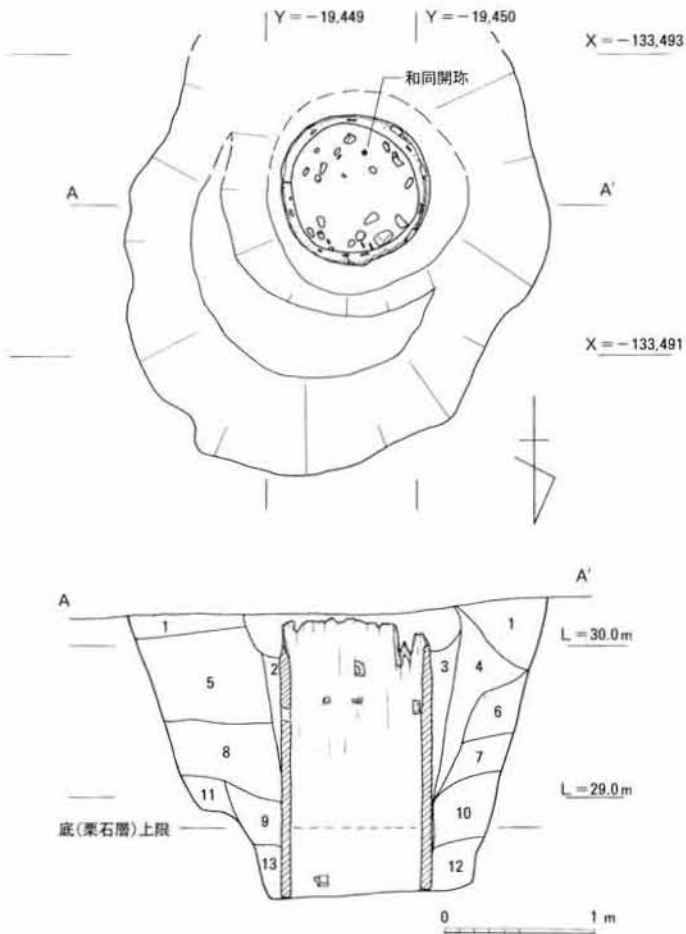


第22図
斎串実測図

手前で終わる。この溝は北接する土塁状の遺構 SX98442に付随するもの
と考えており、本来はトレンチ中央で南折する土塁に沿っていたと思われ
る。溝内からは、奈良時代の土師器・須恵器がみつまっている。

SE98429 西側にある刳り貫き井戸。掘方は楕円形で長径3 m以上、短径
2.5m北東にテラスを持っている。井戸側は直径約1.1mの丸太を刳り貫い
てつくったもの。厚さは約0.07m、上部は失われているが、下部の残りは
良く約1.9mが残る。内外面の加工痕が明瞭である。井戸側の上部には孔
が8箇所開けられ、孔の裏には板や石が当てられたものがある。井戸底は
約0.5mの厚さで栗石が詰められていた。

遺物は、内部から土師器・須恵器を中心に瓦・製塩土器・土錘の他、上



- | | |
|----------------------------|------------------------------------|
| 1. 黄褐色粘質土(砂まじり) | 8. 青灰色粘土暗灰色粘土ブロック
混(5よりブロックが多い) |
| 2. 黒灰色粘質土 | 9. 青色粗土青灰色粗砂まじり
(黒灰色ブロック少しまじる) |
| 3. 暗灰色粘質土(灰色砂まじり) | 10. 明青灰色砂 |
| 4. 青灰色粘土・暗灰色粘土互層 | 11. 青灰色粘土(暗灰色粘土若干まじる) |
| 5. 青灰色粘土(暗灰色粘土ブロック
まじり) | 12. 黒灰色粘土 |
| 6. 青灰色粘土 | 13. 暗灰色粘土(礫まじり) |
| 7. 明青灰色粘土 | |

第23図 SE98429実測図



第24図 SE98429

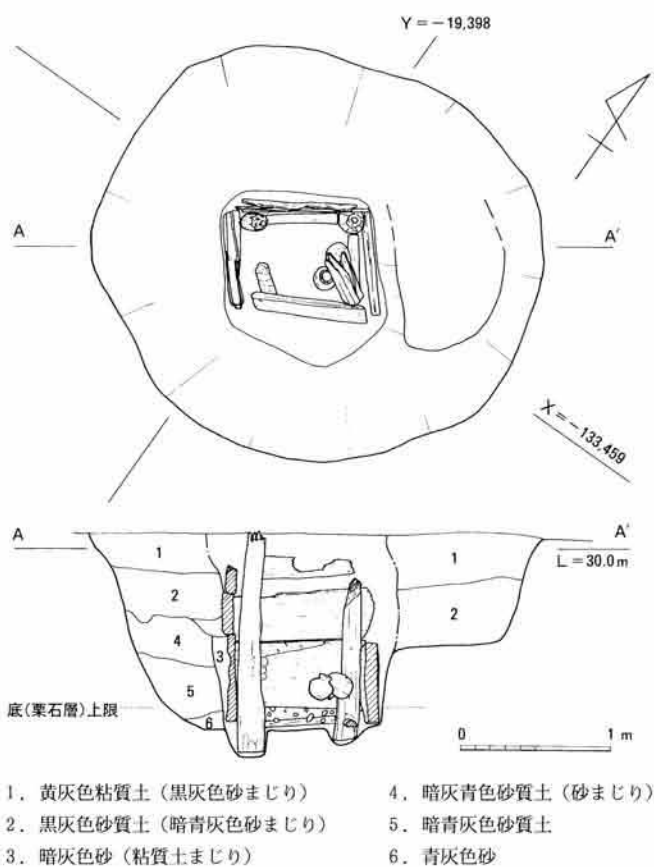
層からは瓢箪、中層から祭祀に用いる斎串（5）が3枚、底の栗石直上から和同開珎（71）がみつかった。掘方からは、土師器・須恵器・製塩土器・土錘・木片がみつまっている。奈良時代後半。

この他、トレンチ東部では遺構面上層から瓦器碗の入った複数のピットがみつかった。これは東隣の5トレンチに繋がるものと思われる。

5トレンチ 最も東でV区に位置する。ベース層は北から南東へ傾斜してゆく。直上の遺物包含層は南に厚く堆積する。遺物は土師器・瓦器が多くみつき、須恵器・青磁・白磁・鉄製品もみられる。主に鎌倉時代初期のもので、試掘調査の成果と一致する。

遺構は全域からピットがみつかった。小ピットが多く、建物の復原等十分に検討できていない。北側では、井戸が2基みつかった。時期は井戸・ピット共に飛鳥時代（7世紀）のもの、平安時代後期～鎌倉時代前半（12・13世紀）の大きく2時期に分けられるが、ほとんどは後者である。

SE985145 北部にある井戸。井戸側は西偏約35°の方向を持つ。四隅に柱を建て、横板を廻らしたもので、東西が約0.9m、南北が約0.7mの長方形である。掘方は直径約3mの円形で東側にテラスを持つ。柱は径約0.2mの太さで、根元部分に半裁した丸木を棧とし



第25図 SE985145実測図 遺物は見通し



第26図 SE985145（西から）



第27図 SE985145（南から）

て挟み、固定している。井戸側は3段分残っていた。下段は幅約0.6m、長さ約0.8m、厚さ約0.05～0.08mの厚い板で統一され、四方が残る。上部側板は北・西のみ残っている。板の内側は丁寧につくられ、外面は粗く道具痕が残っている。



第28図 SE985122 (東から)

遺物は上面から、土師器・須恵器、内部からは、完形の須恵器ツボ(56)や平瓶(57)がみつかった。掘方からは、須恵器片以外ほとんどみつかっていない。飛鳥時代(7世紀)。

SE985122 トレンチ北西端の井戸。正南北の方向を持つ。長さ約0.5m、厚さ約0.02mの薄い横板を、一辺約0.35mのセイロ形に組合せ、積み上げている。内側には直径約0.34mの曲物を積み上げ井戸側とし、隙間をあけて、最下部にも曲物を入れ、水溜りにしている。



第29図 5 トレンチ遺構実測図

横板・曲物は3段分残っていた。セイロ組みの横板は曲物を固定し保護する役割を担う。横板と曲物との隙間には細い杭や石材が入れられていた。

遺物は内側から、完形の瓦器碗を始め、土師器・須恵器・白磁が、掘方からは土師器・須恵器・瓦器・白磁・木製品がみついている。セイロ外側には補強のために、曲物の底板・農具等が当てられていた。

SK985101 ほぼ中央にある東西約0.6m、南北約0.18mの溝状の土坑。内部から完形品を含む瓦器碗・皿、土師器がみついている。

(3) 遺物

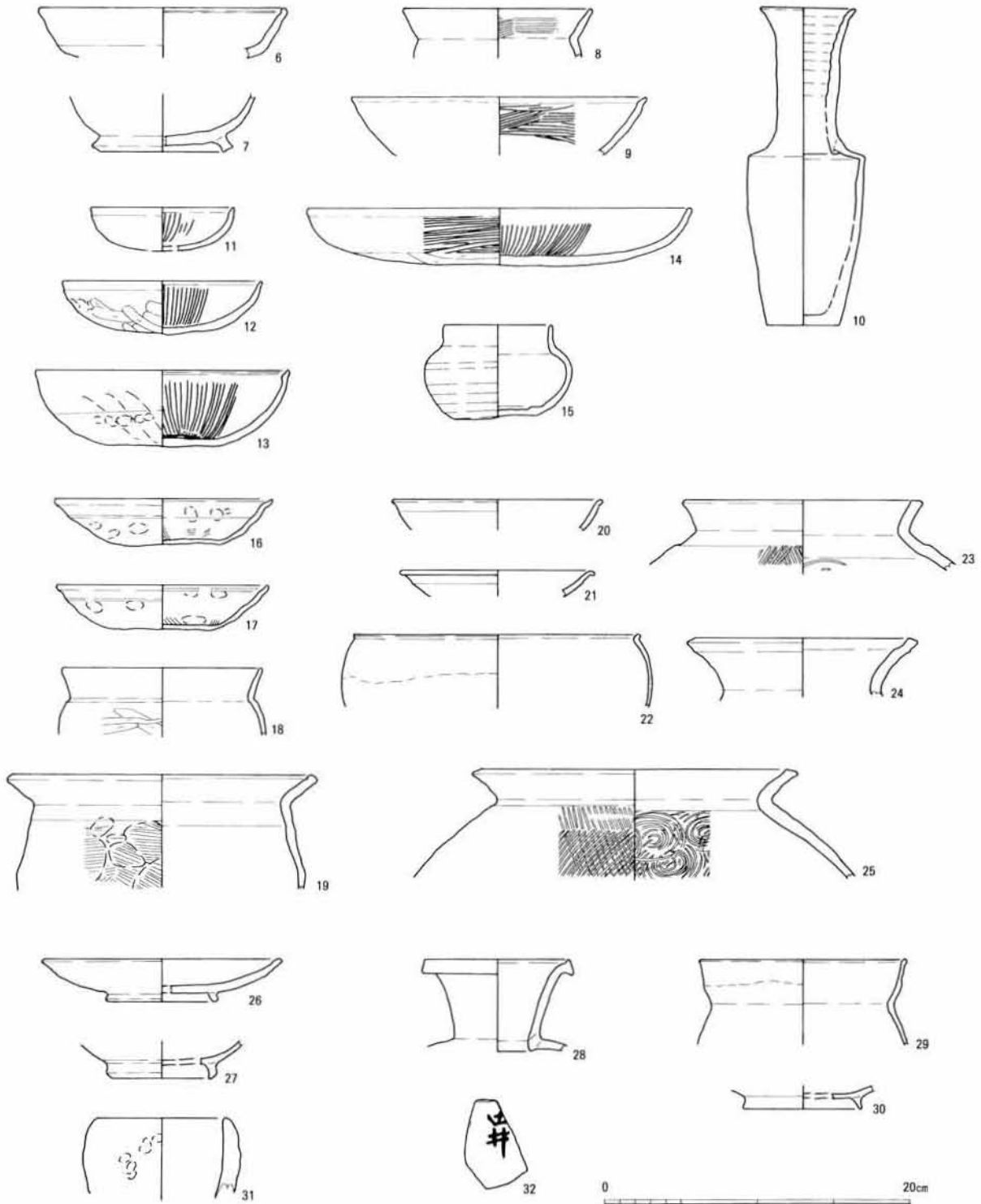
今回の調査では、遺物包含層や遺構から土器・土製品・木製品・木材・銭貨・鉄器・鉄滓など大量の遺物がみついている。出土点数のほとんどを占めるのが土器で、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入磁器・瓦・製塩土器・土錘・土馬などが、木と合わせ、コンテナに約150箱みついている。主な器種は、土師器・須恵器・瓦器が多い。土器のうち、緑釉陶器・灰釉陶器の占める割合も比較的高い。また4か所の井戸からみつかった柱・板等の構造材は、大型のものが多い。現在整理中のため掲載は主な遺構の土器に止めている。

1は1トレンチ南部の遺物包含層からみつかった土馬の頭部である。2はSA981298の柱穴からみつかった把手、鉄鍋のものと思われる。3・4は3トレンチの井戸SE98301からみつかった木製の櫛である。5は4トレンチの割り貫き井戸SE98429からみつかった斎串である。

6～9は1トレンチのSB981297の柱穴からみつかった土器である。6は口径16.0cmの土師器杯の口縁部で、内部に沈線状の段を持つ。7は須恵器のツボ底部である。8は黒色土器カメ。内黒で口径12.1cm、口縁部内側にはヨコハケがされる。9は口径19.2cmの黒色土器の碗である。内黒で内面にヘラミガキが施される。6が8世紀の他は、9世紀末から10世紀初めのものである。

10はSA981298からみつかった須恵器。口径6.1cm、器高20.9cmのツボGで、焼きは悪く、灰白色でやや軟質である。肩部に亀裂があり、半身に灰をかぶる。9世紀。

11～15は、2トレンチの土坑SK98277からみつかった土器である。11～13は、土師器杯。11は口径9.2cm、器高約2.8cmで、淡褐色である。内面には一段放射状暗紋を施す。12は、口径13.0cm、器高3.5cmで、淡褐色。口縁端部の内側に段を持つ。内面には一段放射状暗紋を施し、外面は指オサエの後、ヘラケズリを行う。13は、赤褐色で、口径16.5cm、器高5.0cmのもの。口縁部は、一旦内側に肥厚し、端部をつまみ上げ段をつくる。内面には一段放射状暗紋、見込にはラセン状暗紋を施す。焼きは良好で硬質、胎土も他の土器に比



- 1 トレンチ：6～9 SB981297 土師器杯（6）、須恵器ツボ（7）、黒色土器カメ（8）・椀（9）
 10 SA981298 須恵器ツボ（10）
 2 トレンチ：11～15 SK98277 土師器椀（11～13）・皿（14）、須恵器ツボ（15）
 3 トレンチ：16～25 SE98301B 土師器杯（16・17）・カメ（18・19）、須恵器カメ（23～25）、灰釉陶器椀（20）・皿（21）、黒色土器鉢（22）
 26～32 SE98301掘方 須恵器ツボ（28）、墨書土器（32）、緑釉陶器皿（26）、灰釉陶器椀（27）、黒色土器カメ（29）・皿（30）、製塩土器（31）

第30図 遺物実測図(1)

べて精緻である。14は土師器皿で、口径25.0cm、器高3.7cmを測る大型のもの。淡褐色でやや軟質である。口縁端部上面に面を持つ。内部は一段放射状暗紋を施し、外面は底部にヘラケズリ、口縁部に綿密な横方向のヘラミガキを施す。15は、須恵器のツボである。口径7.0cm、器高6.2cmの小型のもの。これらは7世紀中頃のもの。

16～25は、3トレンチの井戸SE98301B内側からみつかった土器である。16は口径14.2cm、器高3.1cm、17は口径13.8cm、器高3.0cmの土師器杯である。手捏ね成形で薄い。内外面には指オサエ痕が、見込にはハケメが残る。口縁部はヨコナデされ、外反させた後小さく上につまむ。10世紀初めのものである。18、19は土師器カメの上半部で、口径13.0cmと19.6cmのものである。口縁部はヨコナデ、体部外面は、18はヘラケズリ、19が強いハケメが施される。20は口径13.6cmの灰釉陶器碗、21は口径12.2cmの灰釉陶器皿である。どちらも口縁部である。22は黒色土器の鉢で、口径18.6cm、内黒である。23～25は須恵器のカメの口縁部である。23と25の外面には深いタタキメが、内面には同心円状の当て具痕が残っている。井戸内部からは主に9世紀末から10世紀初頭の土器がみつまっている。

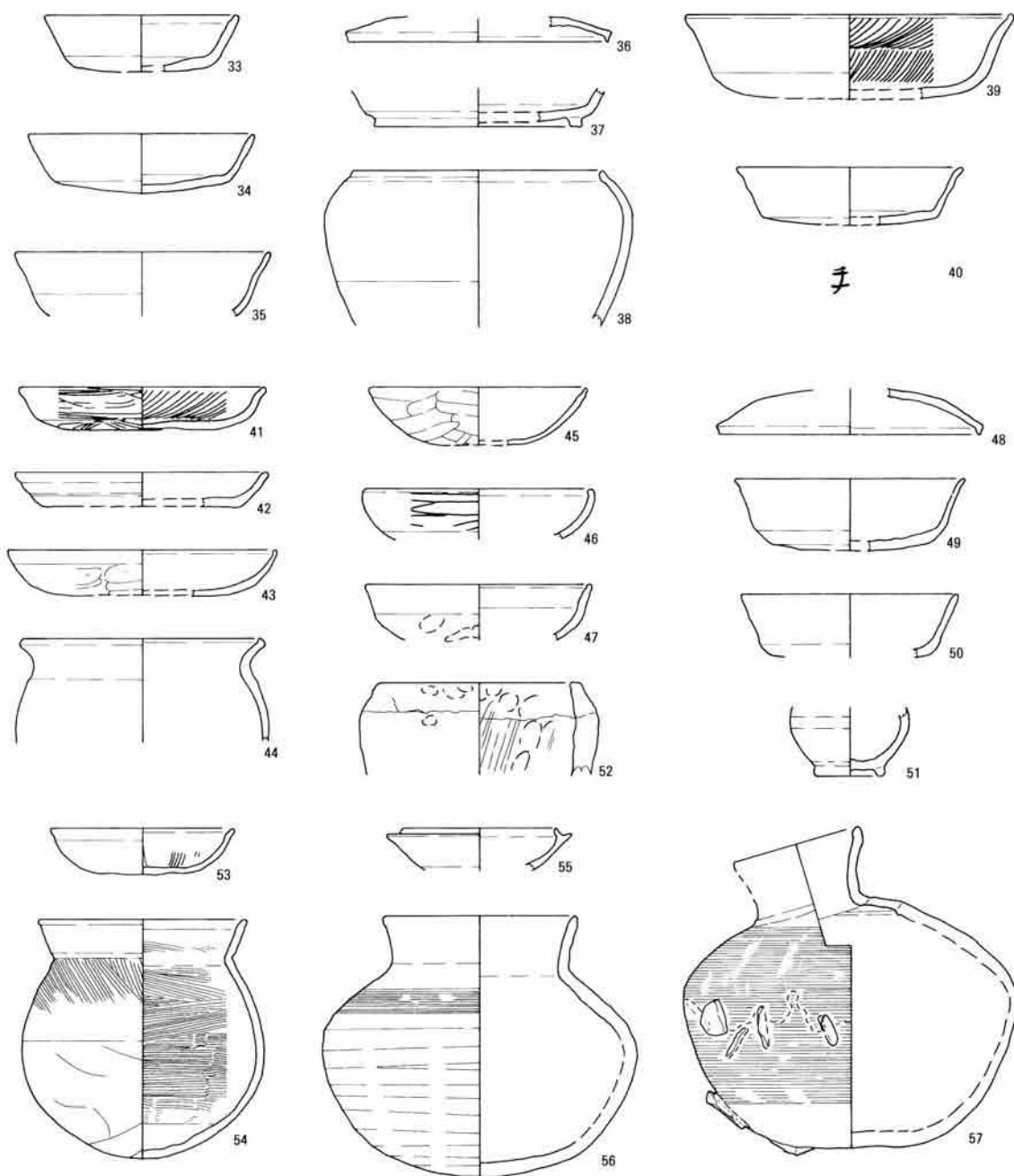
26～32はSE98301掘方からみつかった土器である。26は口径15.4cm、器高2.8cmの緑釉陶器皿である。貼り付けの輪高台を持ち、断面は灰色で焼成は硬質。内外面にヘラミガキを行う。高台底面以外に淡緑色の釉を施す。9世紀中頃の東海産である。27は灰釉陶器碗底部である。胎土は灰白色で、クチバシ状の高台を持つ。28は口径9.45cmの須恵器。平瓶の口縁部と思われる。29は口径13.4cmの黒色土器カメの口縁部。30は黒色土器の底部で、外にふんばった高台を持つ。31は口径8.3cmの製塩土器。黄褐色で、内面に布目が残る。32は墨書土器で、土師器杯の底部。外面に「田井」と読める墨書がある。掘方からは9世紀中葉の土器がみつまっている。

33～39は、4トレンチSD98425からみつかった土器で、33～38は須恵器である。33は口径11.2cm、器高3.3cm、34は口径13.3cm、器高3.5cm、35は口径15.0cmの杯Aである。36は口径15.2cmのフタ、37は杯B底部で、方形の貼り付け高台を持つ。38は口径14.7cmの鉢である。8世紀後半。39は土師器杯で、口径19.2cm、器高約5.0cmを測る。口縁部は緩く外反させ、端部を小さく上につまむ。内面には二段放射状暗紋を施す。8世紀。

40はSD98427の墨書土器で、口径13.2cm、器高3.4cmの須恵器杯の底部に墨書がある。8世紀後半。

41～46はSE98429からみつかった土器で42が須恵器のほかは土師器である。41は上面からみつかった、口径14.5cm、器高2.5cmの皿で、緩く外反する口縁部を持つ。内面には一段放射状暗紋を、見込にラセン状暗紋を施す。外面は底部ヘラケズリの後、全面にヘラミガキを行う。42は口径15.0cm、器高2.0cmの須恵器の皿。口縁外部には、強いナデによる段を持つ。43は口径15.8cm、器高2.7cmの皿。体部を緩く内彎させ、口縁端部を丸く収める。

外面は口縁端部以外ヘラケズリを行う。44は口径14.0cmのカメ上半部である。摩滅が激しい。45は口径12.8cm、器高3.4cmの椀である。外面は全面にヘラケズリを行う。46は内彎した口縁部を持つ椀で、口径13.2cm。体部外面にヘラミガキがされる。



- 4 トレンチ：33～39 SD98425 土師器杯 (39)、須恵器杯 (33～35)・フタ (36・37)・鉢 (38)
 SD98427 墨書土器 (40)
 41～46 SE98429内部 土師器皿 (41・43)・カメ (44)・椀 (45・46)・須恵器皿 (42)
 47～52 掘方 土師器杯 (47)、須恵器フタ (48)・杯 (49・50)・ツボ (51)・製塩土器 (52)
 5 トレンチ：53～57 SE945145 内部 土師器椀 (53)・カメ (54)、須恵器ツボ (56)・平瓶 (57) 掘方 須恵器杯 (55)

第31図 遺物実測図(2)

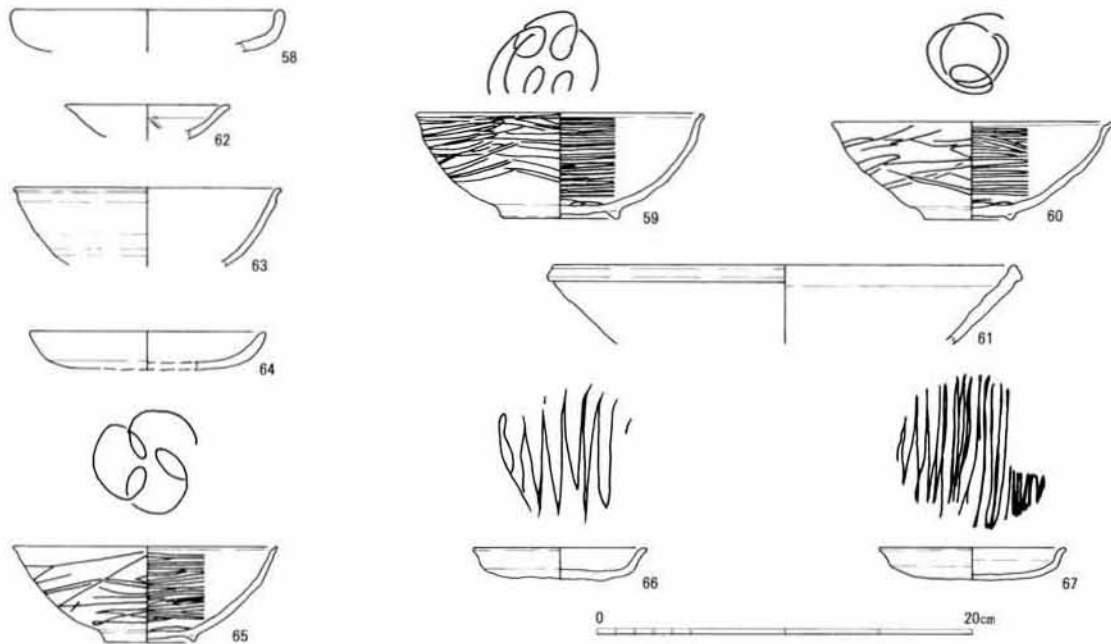
47～52はSE98429の掘方からみつかった土器である。47は胎土が淡赤褐色の椀で、口径13.2cm。体部に指オサエ痕が残る。48～51は須恵器である。48は口径15.4cmのフタ。49、50は杯Aである。49は口径13.4cm、器高4.3cmで、口縁端部を緩く外反させる。50は口径12.7cm。51は胴径7.1cmの小型ツボの下半部である。52は径11.4cmの製塩土器である。内外面には指オサエの痕が残る。掘方遺物は8世紀後半のものである。

53～57は5トレンチの井戸SE985145の土器である。53、54、56、57は井戸側内の土器、55は掘方からみつかった土器である。53は土師器の椀で、口径10.7cm、器高2.7cm。内面には一段放射状暗紋を施す。54は土師器丸底のカメ。口径12.2cm、器高14.2cmを測る。口縁部はヨコナデし、内側は口縁部から体部にヨコハケを行う。外面は体部上半部にナメハケ、下半部にヘラケズリを行っている。55は口径9.0cmの須恵器の杯身である。小さな立上りを持っている。56は口径11.2cm、器高15.5cmを測る須恵器ツボで、少し焼きが甘く、全体に淡灰褐色である。口縁部はわずかに広がる。肩部にはカキメが施される。体部は丸く底部までヘラケズリがされる。底部は丸底であるが面を持っている。内面はナデにより調整され、全面に黒色の付着物がみられる。57は須恵器の平瓶で、口縁部の大半を欠く。器高は19.1cmで、口径約7.6cmの傾いた口縁部を持ち、肩を大きく張出した楕円形に近い丸い体部を持っている。底部は平らで、肩部上面が窪む。把手等は持たない。体部外面には広くカキメが施され、下半部には自然釉、釉着物が付着している。これらの土器は7世紀のものである。

58～63はSE985122の土器である。60、61、62は井戸枠内からみつかった。60は口径14.8cm、器高5.2cmの瓦器椀である。口縁部は外反させ、端部内側に沈線と段を持っている。体部には指オサエ痕が残り、底部は厚く高台は三角形に近い。体部外面には体部全体にまばらなヘラミガキを行い、内面には綿密なヘラミガキを行う。見込には、簡略化したラセン状暗紋を施している。大和産。61は東播系須恵器の鉢で、口径24.2cmである。62は中国製の白磁皿である。口径は8.6cmで、全体にやや緑がかっている。内面に櫛描紋が施されている。これらは12世紀中頃のもの。

58、59、63は掘方の土器である。58は口径14.2cm、器高約2.2cmの土師器皿である。口縁部は直立し、端部は丸く収まる。59は口径14.8cm、器高5.6cmの瓦器椀である。口縁部はヨコナデにより、やや外反し、内側に沈線を施すが、顕著な段は持たない。体部には、指オサエ痕が残り、底部には外側にふんばった高台を持っている。体部外面には密に、内面にはより綿密なヘラミガキがなされ、見込にはラセン状暗紋が施される。63は中国製の白磁椀である。口径14.0cmで、全体にやや褐色がかった白色釉が施される。これらは12世紀前半の土器である。

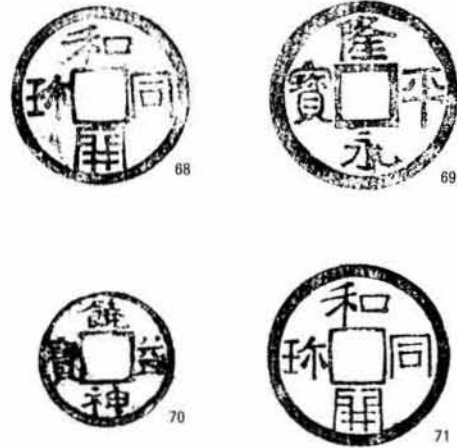
64～67はSK985101からみつかった土器である。64は土師器の皿で、口径12.4cm、器高



5 トレンチ：58～67 SE985122内部 瓦器椀 (60)、須恵器鉢 (61)、白磁皿 (62)
 掘方 土師器皿 (58)、瓦器椀 (59)、白磁椀 (63)
 SK985101 土師器皿 (64)、瓦器椀 (65)・皿 (66・67)

第32図 遺物実測図(3)

2.0cm。底部よりやや厚い口縁部を持つ。65は口径13.9cm、器高5.1cmの瓦器椀である。口縁端部内側に段を持っている。体部には指オサエ痕が残り、底部には三角形の高台が貼りつけられる。体部外面には全体にまばらなヘラミガキがされ、内部は綿密に磨かれる。見込には簡略されたラセン状暗紋が施されている。66、67は瓦器皿で、口径は9.1cmと9.9cmのもの。口縁部はヨコナデにより外反し、底部は不調整で指痕が残っている。見込にはジグザグ状の暗紋が施される。12世紀後半のものである。



SE98301：68～70 SE98429：71

第33図 銭貨拓影

3 トレンチと4 トレンチの井戸からは、土器・木製品その他、銅銭がみついている。68～70はSE98301からみつかった。68は和同開珎である。直径2.4cm、「開」を「開」に作る新和同と呼ばれるものである(708年初鑄)。69は隆平永寶である。直径2.55cm(796年初鑄)。70は饒益神寶である。直径1.8cm(859年初鑄)。残りが悪い。71はSE98429からみつかった和同開珎で、直径2.45cm。最も残りが良い。これも新和同である。

(4) まとめ

今回の調査では、飛鳥時代から鎌倉時代の遺構が見つかった。二又遺跡の最初の調査であり、成果を時代毎にまとめ、今後も継続される遺跡の調査への備えとしたい。

飛鳥時代 完形の土師器皿が底に埋納された土坑や溝（2トレンチ）と、横板組みの井戸、ピット（5トレンチ）が見つまっている。土坑から見つかった土器の中には宮域で使用される赤い土器が含まれている。都との関係を密に持った存在が考えられる。また井戸には、直径0.2mを測る太い面取りされた柱や、厚い板などの使用された木材から、しっかりした建物の存在がうかがえる。

奈良時代 土塁状の盛土とそれに伴う溝、刳り貫き井戸（4トレンチ）、土師器・須恵器の杯やカメなどがまとまって見つかった溝（1トレンチ）等が見つまっている。また巨大な刳り貫き井戸と斎串、その東でみつかった墨書土器等の存在は一般の集落とは違った集団の存在が考えられる。

平安時代 主に西側調査地から、柱・礎板の残った建物・柵列、ピット群（1トレンチ）、3重構造の縦板組みの井戸（3トレンチ）が見つまっている。建物・柵列は直径0.2mの柱穴を持ち、底に根石・礎板を敷いたものである。掘方内部から平安時代前半の土器が見つまっている。また掘方の重複から、建て直しも確認できよう。また2度作り直された井戸Zは、直径約0.2mの柱をもち、井戸側は一辺約1.4mを測る大型のものである。特に井戸Aに使用された木材は丁寧に製材された厚いもので、ほぼ同規格。側板には打刻印を持つものがあり、建物の床に使われる歩板と思われる。これらの木材は転用されたものであり、ここからは床板を持った建物が近くに存在していたことがわかる。遺物包含層の施釉陶器や円面硯・瓦、井戸掘方の墨書土器なども合わせて、ここには官衙的性格を持った施設があったと考えられる。

平安時代後期から鎌倉時代 5トレンチを中心にピット群・曲物井戸が見つまっている。ピット群を建物に復原することはできなかったが、何棟かは建つものと思われる。曲物を使った井戸は小型のものであるが、12世紀の完形の瓦器碗・白磁などがみつまっている。遺構や遺物包含層からも土師器・瓦器や中国製の青磁・白磁が多くみつかった。ほとんどが12～13世紀のもので、木津川の水運によって運び込まれたものと思われる。この時期拠点となる集落が一带に営まれていた可能性がある。

鎌倉時代以降 以降時代には全域が耕作地になっているようで、耕作溝以外の遺構はみづからなかった。

奈良時代、この地域には都（平城京）から大宰府へ続く山陽道が整備され、今回の調査地の西側にある府道付近に道が想定されている。

また、和銅4年（711）に設置されたと『続日本紀』にある山本駅は今回の調査地の南東にある山本集落付近と推定されている。

このようなことから、今回の調査は非常に期待されたものであった。

4トレンチからみつかった奈良時代の土塁状盛土と溝は駅の施設に関連した築地基礎部分と築地雨落ち溝とみることもできようが、断定できない。

この場合、築地の北西角がみつかったことになり、南東側に建物等の施設が推定される。ただし、同時期の刳り貫き井戸は築地の外側ということになる。

いずれにせよ、山本駅推定地付近で奈良時代の遺構がみつかったことは大きな成果であり、今後の調査に期待される。

なお、都が平城京から長岡京へ移り、山陽道が長岡京を起点とするようになると、京田辺市内等を通っていた部分は官道から一般道へと変化する。このことにより、山本駅は廃止されたものと理解される。だが一般道とはいえ、旧都へ至る重要な道であったと考えられる。西側調査地（1・3トレンチ）でみつかった平安時代前期の官衛的施設は新たに設置された山本駅の機能を継承した施設であると考えたい。

4. 三山木遺跡

(1) 調査概要

三山木遺跡は開発地域の中央から南西部にかけて広がる遺跡で、西側山崎地区の丘陵から張り出したJA三山木支店のある台地を中心に東平地へ伸びる。調査地は、台地の南裾部分で遺跡の南端に位置する。

昨年度の試掘調査では、弥生時代から中世の土器がみついている。

まず、調査地の南北に試掘坑をあけて層位の確認を行った。南北ともに良好な古代の遺物包含層を持っているものの、安定した遺構面を見出せなかったため、予定より少し西にずらし約300㎡のトレンチをあけた。

遺構面の地形は、北側の台地からの影響は少なく、西側が最も高く次いで東側が低くなっている。基本層序は表面に耕作土、次いで黄灰褐色の中・近世遺物包含層・灰褐色の古代遺物包含層が続き、そして遺構面直上が暗褐色の弥生時代遺物包含層となる。このうち弥生時代の包含層は、少し高い西側に厚く堆積している。東側は遺構はあるが弥生時代の遺物包含層はほとんどない。遺構面は砂質であるが、西部はキメの細かい安定した黄褐色の遺構面を持っているのに対し、東部は暗灰色の粗い砂質土で安定していない。

遺物包含層からは、弥生土器の他、土師器・須恵器など奈良時代から平安時代の土器が比較的多くみつき、わずかであるが古墳時代や中世の土器もみついている。

遺構は全て弥生時代のもので、西側では土器の詰まった溝、東側では土器が横たわった土坑等がみついている。遺物は前期から中期前半の土器・石器の他、縄紋土器や庄内式土器がみつかった。

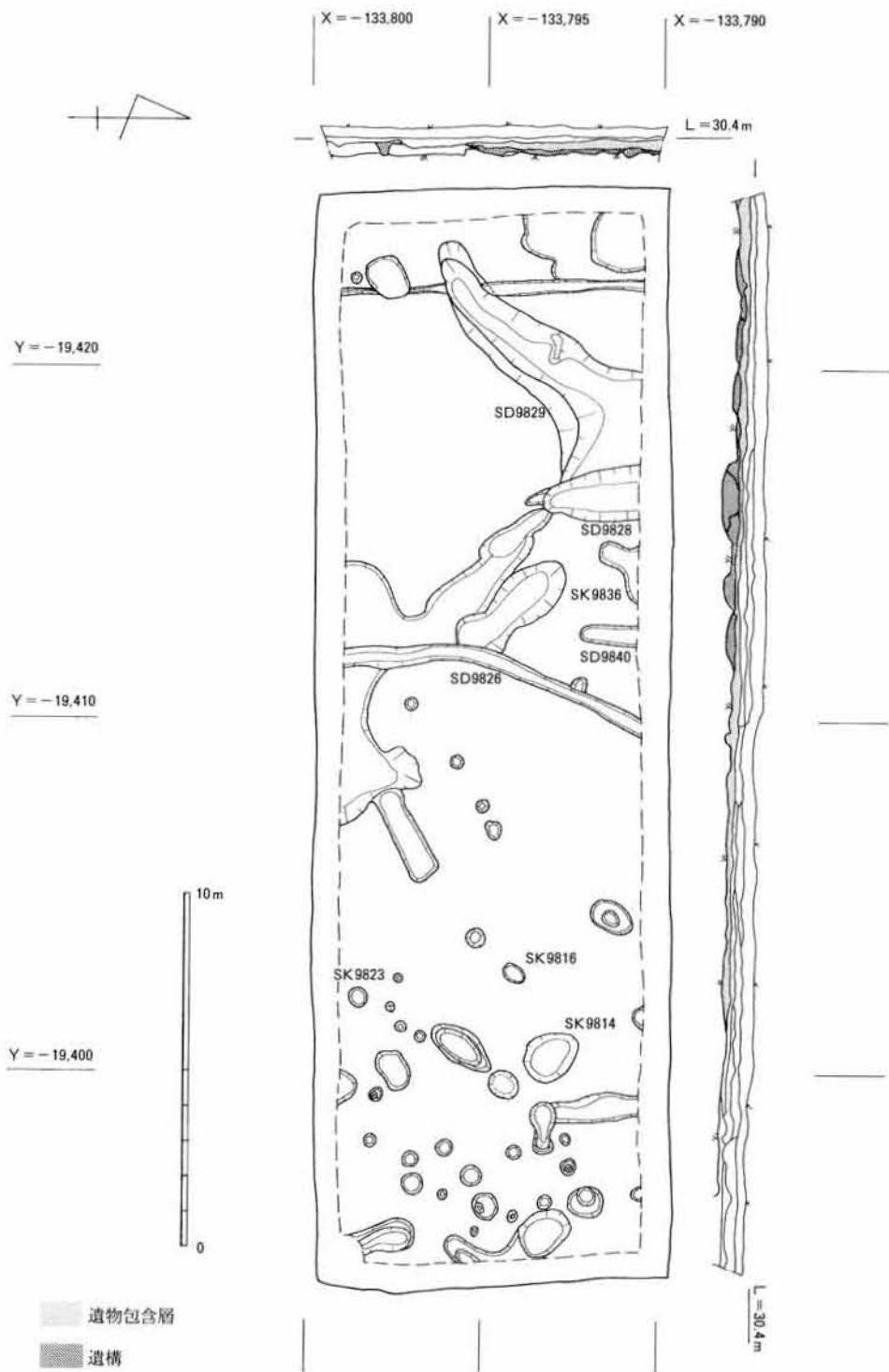


第34図 三山木遺跡トレンチ位置図

(2) 主な遺構

今回の調査では、弥生時代前期から中期にかけての遺構・遺物がみつかった。西側は標高が高いものの、後代の影響をあまり受けておらず遺構・遺物の遺存状況は良い。反対に東側では、弥生時代の遺物包含層がなく、遺構・遺物は上方を失っている。

以下主な遺構を簡単にみていきたい。



第35図 遺構実測図



第36図 トレンチ全景（北から）

SK9814 東側にある長径約1.7m、短径約1.3mの北西に傾く卵型の土坑。内部には北西にツボ底部が、全体からは土器片が詰まっていた。みつかった土器には、数条の沈線や貼り付け突帯を持つ破片もあり、弥生時代前期後半の特徴を持っている。



第37図 SK9814（東から）

SK9816 東側にある長径約0.7m、短径約0.5mの北東に傾く楕円形の土坑。側面に穿孔された大型のツボ（8）の体部半身が横たえられていた。前期の土器棺墓。



第38図 SK9816（南から）

SK9823 東部南端にある、直径約0.6mの円形の浅い土坑。頸部に櫛描波状紋をもつ中期のツボがみつまっている。小型の土器棺墓と思われる。



第39図 SK9823（北東から）

SD9829 西部北側の幅約2m、長さ約8.5m、深さ約0.3mの溝。北東に向かって伸び、東は南北方向の溝に切られ、北は壁に当たっている。溝内は暗褐色の堅い土で、大量の土器が詰まっている。内部の土は数度にわたり堆積し、土器のほとんどは上層からみつかった。土器には流された痕跡は少なく、同個体の破片がまとまっているものの、設置された様子はないことから、この場に廃棄されたものと考えられる。器種はツボとカメで占められ、土器以外には石包丁や石鏃・石錐などの石器やサヌカイト片、大ぶりの石や炭化した木製品などがみつかった。土器は概ね弥生時代中期前半のもので、生駒西麓産の土

器の他、縄紋土器も含まれている。

SD9828 西側北端にある、幅約1.5m、長さ約2.7m以上、深さ約0.35mの南北方向の溝。西側でSD9829を切る。黒灰色粘土が堆積し、土器・石器がみつまっている。

SD9840 中央北端の、幅約0.6m、長さ約1.7m以上、深さ約0.05mの溝。北はトレンチ外に続き、内部に黒灰色粘土が入る。ほぼ完形の器台（9）等がみつまっている。

SD9826 中央を南北に縦断する溝。幅約0.3m～0.6m長さ9m以上、南北は壁に当たる。内部からは土器や径0.2m程度の大きさの石がみつまっている。切り合い関係から最も新しい遺構である。

この他にも弥生土器・石器の含まれた遺構が多くみつまっている。遺構にはトレンチ外に伸びるものも少なくなく、周辺への遺跡の展開が予想される。

(3) 遺物

今回の調査でみつかった土器は、コンテナにしておよそ15箱を数える。ほとんどを弥生土器が占め、土師器・須恵器等が続く。また量的に少ないながらサ



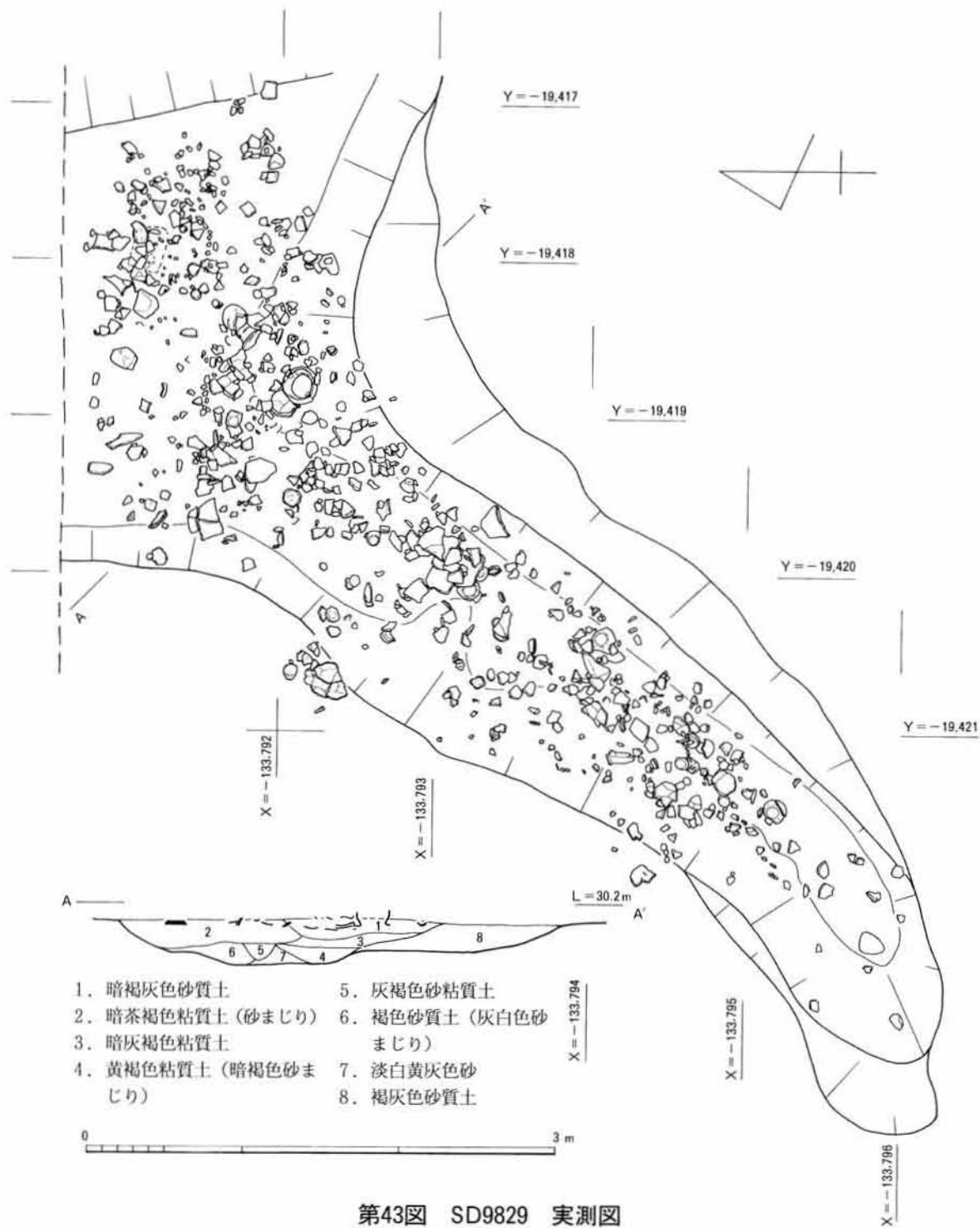
第40図 SD9829（西から）



第41図 SD9829（北東から）



第42図 SD9829土器出土状況



ヌカイト製の石器・剥片等もみつかった。現在整理作業中のため、掲載は主なものの内、遺存状況の良いものに止めた。

1～7は、SD9829からみつかった土器のうちの主なものである。土器は全体的に砂粒を多く含んだ胎土である。

1は生駒西麓産のツボで、口径17.8cm、器高26.8cmを測る。少し傾いた口縁部は大きく外反し、端部を丸く収める。球形の体部を持ち、底部は広めで厚く、わずかにあげ底である。胴径は15.6cmで、口径が胴径をしのぐ。摩滅のため、体部以下の調整はわからないが、口縁部はヨコナデで調整され、頸部と肩部にはそれぞれ8条一単位の櫛描直線紋が3段施されている。

2は口径11.3cm、器高33.4cmを測るツボである。口縁部は外側にわずかに広がりつつ直行し、端部外側に小さな面を持つ。肩は緩やかに広がり、球形の体部、底部は厚く平らである。胴径は19.9cmで、口径を大きくしのぐ。胎土は砂粒を含み白橙色。口頭部には8条一単位の櫛描直線紋が5段めぐり、肩部には歪みを持った櫛描直線紋が4段めぐり、そのうち上2段分には、縦方向の直線紋2単位のセットが4か所に施される。体部上半にも3段分の櫛描直線紋がめぐり、摩滅のため調整はわからないが、底部内面には指オサエ痕が明瞭である。

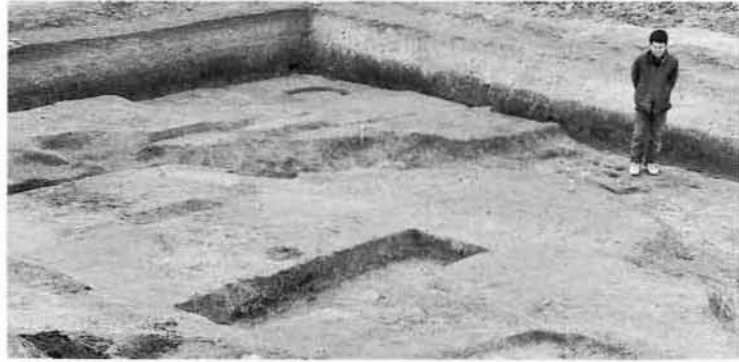
3は口径18.8cmのツボ口縁部である。大きく外反した口縁部と細い頸部を持つ。器厚は端部に向い厚くなり、端部外側に面を持つ。全体にヨコナデされ、内面下方に、指オサエ痕が残る。

4は太い頸部を持ったツボの口縁部で、口径20.4cmを測る。口縁部は外反し、端部を外側に小さく折り返し丸く収める。頸部が厚く、肩に向い緩やかに外反する。内面はナデ、ヨコナデで調整され、外面はタテハケがされる。

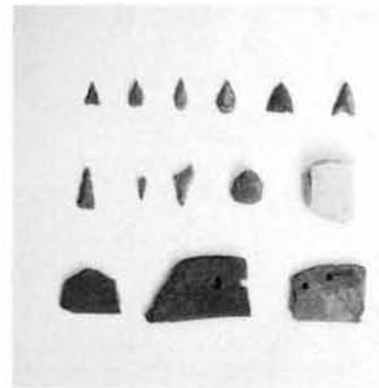
5は口径19.8cmのカメの上半部である。胴径は口径を超えない。

6は口径20.7cmのカメの上半部である。口縁部は肉厚で、胴径は口径を超えない。口縁部内面にはヨコハケがされ、体部外面には、粗いタテハケが施される。

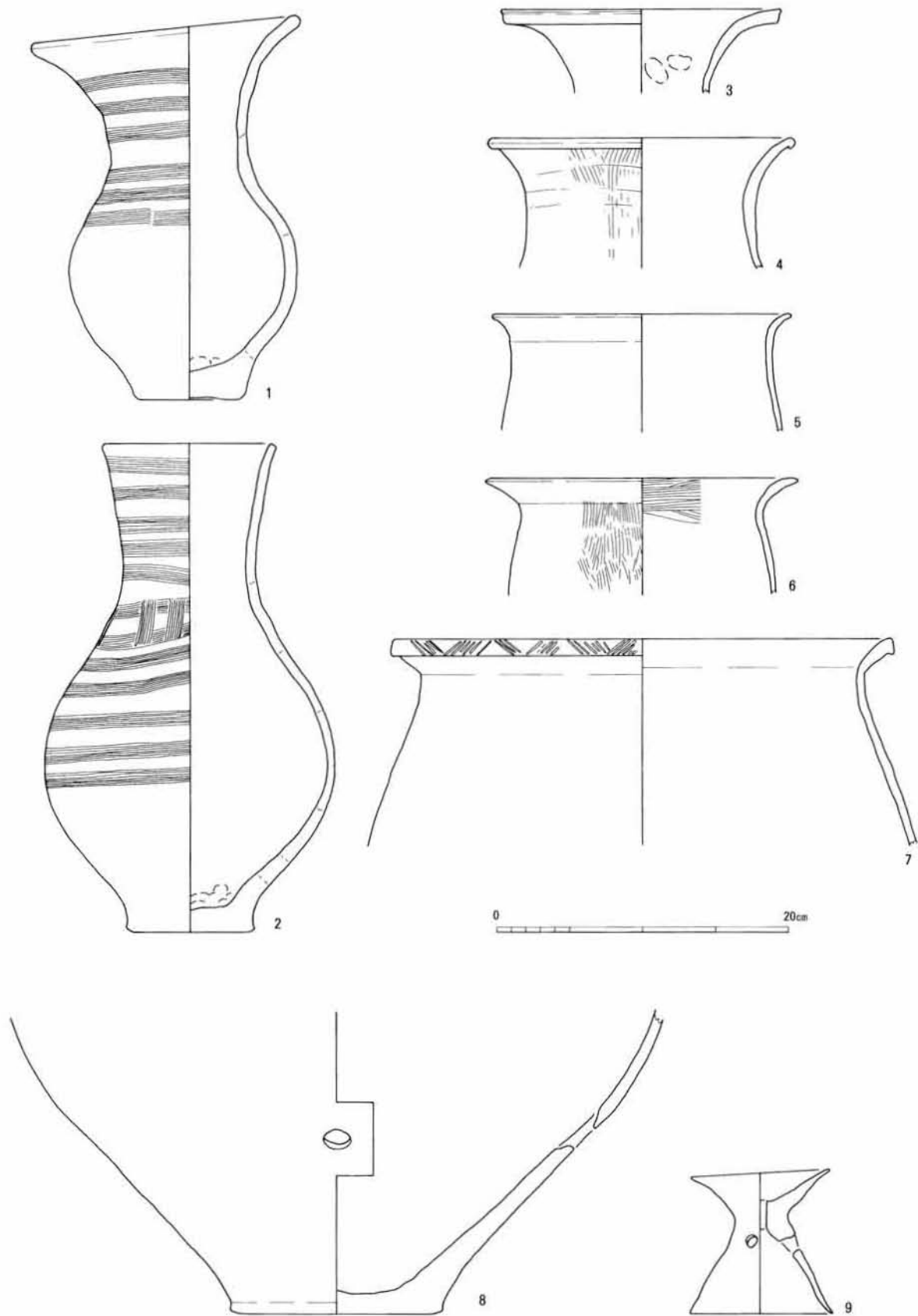
7は大型のカメで、33.8cmの口径を持つ。頸部で折れる口縁を持つ。口縁端部には3条



第44図 SD9829完掘状況



第45図 石器



SD9829：弥生土器ツボ（1～4）・カメ（5～7）、SK9816：弥生土器ツボ（8）、SD9840：庄内式土器器台（9）

第46図 遺物実測図

から5条の斜行する沈線を引く。体部は頸部から直線的に広がり、胴径は口径をしのぐ。外面はタテハケがされていたと思われる。

この他、この溝からみつかった土器の中には、ツボではたて方向の櫛描波状紋を持つもの、カメでは口縁端部に刻み目を持つものなどが確認される。溝内の遺物は概ね中期前半のものである。

8はSK9816からみつかったツボの下半部である。体部下方を穿孔しており直径約2cmの孔を持つ。広く安定した底部を持っている。肩部と思われる破片には6条分の平行する沈線がみられる。前期後半のもので、土器棺として用いられている。

9はSD9840からみつかった小型器台で、遺存率が良い。受け部はやや傾き、盃形である。口径9.4cm、器高9.8cm、底径9.6cmを測る。脚部は中空で、裾高、器厚は薄く、上方には直径0.8cmの孔が三方にあけられている。淡褐色を呈し、胎土はやや密。比較的小さな砂粒を含む。古段階の庄内式土器である。

遺構からは石器が少量であるがみつまっている。石器は製品と材料・剥片に分けられる。製品では、石包丁・石鏃・石錐・石匙・石斧がみつまっている。石包丁・石斧以外はサヌカイト製のものである。石斧は白色の硬い石材で作られている。剥片はサヌカイトで、自然面の残るものやナイフ状の薄いもの、0.1~0.3cm程度の小片の集まりなどがみつかった。

(4) まとめ

以上、今回の成果を概観してきた。もう一度整理し、調査のまとめとしたい。

縄紋時代 晩期の土器がSD9829などの遺構から弥生土器に混じってみつまっている。調査地の西150mにある山崎神社には、この時代のものとされる石棒が所蔵されており、周辺での遺物の発見が長らく期待されていた。今回初めて同時代の遺物がみつきり、神社所蔵品が周辺からみつかった可能性も高まったものと考えられる。

弥生時代 前期では、調査地の東側部分に横たえたツボの入った土坑や土器片が多く入った不整形土坑がみつまっている。これらはそれぞれ土器棺墓・土坑墓と考えられ、この一帯が集落の墓域の一部であったとみられる。中期の土器棺墓も隣接しており、継続して墓域であったといえる。

中期では、東側部分の墓地のほか西側から溝・土壇等がみつまっている。特にSD9829からみつかった大量の土器・石器、石片等は、流された痕跡が少なくその場に廃棄されたと考えられる。しかしこの溝は北東で他の溝や壁に切られており、全貌は不明で、性格もはっきりしないが、後続する時期の遺物はみつからず、中期の早い段階に大量廃棄されたことがわかる。

これらの遺構・遺物の存在は、土器・石器を使用していた集団の居住地が近隣に存在し

ていることを示す。現在、これに対応する集落遺構の存在は確認されておらず、今後の周辺での調査に期待されるわけであるが、遺物の出土状況から、隣接する地区に存在する可能性が高く、それは北側の台地状ではないかと考えている。

中期後半から後期の遺構・遺物はみつかっていないが、SD9840からは、古段階の庄内式土器の器台がほぼ完形でみつまっている。

古墳時代以降 遺物包含層から、古墳時代のツボ、高杯のほか、奈良時代から平安時代の土師器・須恵器や灰釉陶器などがみつまっている。遺存状況の良いものもみられ、近くに遺構の存在が予想されるが、今回はみつかっていない。

中世になると一帯は耕作地として利用されたようで耕作溝と思われる遺構はみられるものの、遺物の量も激減する。

今回の調査でみつかった弥生時代の遺構・遺物は周辺地域の調査でも例の少ない時期のものであり、弥生時代の空白時期を少し埋めることができた。更に溝からみつかった大量の土器は一括性の高い良好な資料であり、今後の調査に生かされるものである。

《参考文献》

- 佐原 真編『弥生土器 I』ニューサイエンス社（1983）
- 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂（1985）
- （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター編『京都府弥生土器集成』（1989）
- 古代の土器研究会編『古代の土器1・都城の土器集成I』（1992）
- 古代の土器研究会編『古代の土器2・都城の土器集成II』（1993）
- 高橋美久二『古代交通の考古地理』大明堂（1995）
- 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社（1995）
- 京田辺市教育委員会「三山木地区特定土地区画整理事業地内試掘調査概報」『京田辺市埋蔵文化財調査報告書第26集』（1998）

平成11年3月30日 印刷

平成11年3月31日 発行

二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報

—三山木地区特定土地区画整理事業地内の調査—

(京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第28集)

編集・発行 京田辺市教育委員会

〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地

電話 0774-62-9550

印刷 明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

電話 0742-63-0661